

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年三月作品集

夫の死

辻純江

六十四年を一緒に過ごした夫が、十一月二十七日に他界しました。良いことばかりではなかったけれど、概ね幸せに過ごしたと思えます。あんなこと、こんなこと、折々に思い出します。不思議に涙は出ません。一度だけ、声を上げて、一人で泣きました。夫の死は、別れではなく、これからも、ずっと一緒だと思っています。

草紅葉刈られし池のよそよそし

公孫樹散る帽子の好きな夫なりき

入りたる柚子湯の話誰ともせず

冬ざるる車窓の景や旅一人

寒波来る夫の四十九日来る

供へたる蜜柑二つの光かな

翡翠のいつも来る杭冬夕焼

南瓜煮ぬままの今年の冬至かな

線香の煙の揺るる寒暮かな

だんだんに慣るる暮しや春隣

《作品鑑賞》

松田裕子

昨年末、ご主人が亡くなられてご心痛如何ばかりかと推察いたします。

本当に仲の良いご夫婦で、いつも羨ましく思っておりました。ご主人の包容力にいつも守られて、二人三脚で幸せな結婚生活を送られました。句のあちこちに喪失感を感じることができ、何度も何度も読み返しました。

辻さんの感性豊かでセンスある俳句が大好きです。

草紅葉刈られし池のよそよそし

擬人化ではありますが、センスの光る俳句です。さっぱりした池の周りがなぜか寂しく感じるのです。

入りたる柚子湯の話誰ともせず

柚子湯にほっこりしても、話す相手がいないのです。表現力にただ感心するばかりです。

寒波来る夫の四十九日来る

少し心の整理ができた頃、寒波が来たのでしよう。来る、来るのリフレインが効いています。

南瓜煮ぬままの今年の冬至かな

いつもは、ご主人の好物の南瓜を冬至には煮るのです。具体的に南瓜を出したことで、いっそう作者の寂しさが表現されています。

だんだんに慣るる暮しや春隣

春隣が、前を向こうとする作者の決意をはっきりと表しています。ご主人は、いつもあなたを見守っていらっしやいますよ。

植林を抜けて雪山広がりぬ

春浅き川辺の風に吹かれをり

初蝶の白居て黄居て上り坂

鶴翼の陣を思はず雪の山

冴返る町に篠突く雨の降る

初蝶のまがり角過ぎ高く飛び

ピーク踏みくすぐつたさの頬の雪

けふひと日蕭蕭として春の雨

睦みつつ蝶舞ひ上る青き空

早春の山に地図読む楽しさよ

初音かなしばらく藪に目を凝らし

農小屋に紅梅の枝垂らしけり

けふの山路の臺にはまだ早く

漣は川辺の高き梢より

上げ潮に身をまかせたる春の鴨

尾根に沿ひ登つてゆけばあたたかし

うららけし目覚むれば海光りをり

また違ふ鳥来てをりぬ彼岸桜

地の人に聞いてより行く春の山

のどけしや久方ぶりの人と居て

彼岸桜の下を離れて振り返る

人に会ふ筈もなく春の藪山

刈込まれなにやらゆかし柳の芽

京あられ供へ窓には春の月

雪解の川となりゆく遺跡かな

忘れ雪惜しみて夜の更くるなり

天井に止まつてをりぬ春の蠅

べらたで酌むべらたのほか何も要らず

いづくへか彷徨ひゆかん花馬酔木

あざみ

佐保光俊

高尾ひとみ

弁当に青菜たつぷり春来たる

くたびれし身に水仙の匂ひ来る

庇打つ雪解の雫夜半に聞き

子に握るむすびほろりと春の朝

枝垂梅くぐりて夫の若返る

比治山の雲の軽きや春めける

母の膝に絆創膏を張る余寒

春の泥我の足跡くつきりと

川音に混じり木叢の初音かな

芽吹山一人二人と行き交へり

勤続やけふも患者と青き踏み

梅香り石段下へ見に行ける

碑を見むと踏みたる春の土

雛の眉りんと迎ふる生家かな

吹く風は梅見誘ふ声なるか

字の読めぬ碑のあり春の草

春望やデルタの先に海が見え

泉邸のうららの池の橋渡る

静けさの中座す雨後の春の山

山遊び吾子悠々と遠ざかる

梅園の枝垂れは蕾ばかりなり

芽吹きたる枝に帽子の掛けられて

こそばゆし君の嗔声と木の芽雨

春北風に茶畑なほも静まりて

あれこれとリュックに詰めて受験生

受験の子襟にアイロン効かせたり

一片の梅零れたる三和土かな

オペラ果て外へ出づれば春の雪

泣き言の君もよからん草餅を

床の梅襖を引けば匂ひ来る

亜矢

綾乃

井藤希

ひとり来て古刹に梅の香りかな

露のたう探し雑事の消えにけり

峡の道ふれて零るる冬いちご

臥龍梅境内に香の漂へり

雨兆し静けさに果つ二月かな

我が庭に咲き始めたり水仙花

忌日来る母植ゑし梅香りけり

春の雪藪に雀の騒ぎをり

車椅子下りて屈みぬ節分草

八重一重松雪草を覗き込む

ミモザ咲く坂を下れば潮匂ふ

肩を病む夫の介助や梅真白

春の雨怪我で休みし日の窓に

磴の道すき間すき間に草の萌

雪解川木橋の我に響きけり

うららかや庭の移ろひ見てゐたり

はや弥生谷の水音麓まで

春の日を椿が一葉つつ浴びて

藪椿祖母の背に見し日を思ふ

一步より沈丁匂ふ友の庭

白魚を子はためらうて躍り食ひ

黄水仙日差し明るき朝の庭

春光やをさなは鯉に話しかけ

春光や雀の声の場所探し

はくれんが故郷までの山々に

春の海まぶし鉄路は湾に沿ひ

子の長き髪編む母や受験の日

菜の花や四万十川に雨の降る

春たのし渡船は長き汽笛引く

母いつもここの畑に牛蒡蒔く

大畑恵

暁子

すみれ

海のない町の釣具屋春時雨

甘夏を包み手のひら香りたり

故郷の民話を読んで春浅し

入口に中古のピアノ春時雨

引越の積み上げし荷や初桜

春浅し白磁の茶碗二つ買ふ

歌声は電子音なり春の宵

髪撫づるごと芽柳に触りたり

枝垂梅卒業茶会開かれて

声優の代わりしアニメ水温む

この道も木蓮の家見つけたり

梅の花ズームで写真撮つてをり

墳丘を道標にし風光る

玻璃戸開けすぐそこに有る春の海

藪椿飛び交ふ鳥のあまたなり

一人ずつ呼ばれる内示花曇

もつれあふ蝶をいつしか見失ふ

冠木門入りてすぐそばミモザ揺れ

朧の夜ローマ数字の壁時計

山の駅出でて道問ふ菜種梅雨

春禽がこちらの藪に移りけり

朧月地図の古道をなぞりたる

船行きて向うに四国桜まじ

朝ぼらけしきりに鳴いて春の鳥

抱きしめた子猫するりと抜けた腕

突堤で打明け話桜どき

朝東風やもう少しだけ寝ていよう

風信子探偵事務所は二階なり

小道みな海まで続き花菜風

幼子のスキップをする鼓草

竹田千紘

知佳子

ちどり

春浅し老人も手をつなぎたり

その横を歩けば山茶花がぼとり

凍雪の平野に黒き軌条あり

梅香る飢肥の町並坂ばかり

裏山の笹鳴聞いて登りけり

海になく流水にだけ映る影

梅の香や時々あがる笑ひ声

庭園でまず山菜莢に迎へられ

流水の向こう大陸の連山

錦鯉水路に走る余寒かな

梅咲ける家主の顔を未だ知らず

如月の始発待機の一両や

母摘みし鹿尾菜と云うてくれにけり

鳥の来て微かに揺れて梅白し

満席の敵の声援麗かに

振り返り手を振る友の春手袋

今日もまた仰ぐことから春の空

春の空スコアボードの知らぬ名よ

春月やバイクの爆音遠ざかる

その家を覆へるほどにミモザ咲く

満員の視線春日の背番号

春朧寂しきときは音読す

朝夕に待ちみし薔薇の芽ぐみけり

歴代の記念写真や春惜しむ

朧夜の夢に聞きたき夫の声

手を反らせ片栗の花真似てみる

春愁や振り向く展望の出口

料峭や線香早く燃え尽きて

久々の春の雨かな小庭にも

行く春や明日は立ち入り禁止なり

辻純江

雲雀

ふじ女

薄氷の音なく融けてしまひけり

川端の並木歩けば木の芽風

戻り来る散歩仲間や春隣

ゆるゆると護岸に触るる春の川

朧なる空夕星の見え始む

義母の忌は桜隠しに出会ふころ

突然の訃報紅梅よく咲いて

宵星の並んでゐたり春夕焼

梅林を群れて目白の渡り行く

雛飾る子ら去りてより吾のために

車拭き終へし雑巾水温む

黄昏をひきとめてゐる白椿

初蝶の窓辺に寄りて去りにけり

白木蓮散りたるを避け通りたる

畦焼くや隣家の畦を種火とし

初蝶の影に手を出す母の居て

朝寝してデイの迎へに目覚めたり

また聞きの友の訃報や蜆汁

山焼の勢ひについ後退り

春の闇指先に触る葉先かな

掘割の水面に映り柳の芽

花辛夷病室からもよく見えて

群鳥の飛び立つ春の朝日かな

目ざましを薄目に探る春曙かな

花菜雨やがて日照雨となりにけり

丁寧に医師説明し春日かな

誰一人継がぬ農地や花櫛

道すがら子の話聞く日永かな

山笑ふ思ひ出したり吾が子の名

参道の濡れし敷石春灯

松田裕子

村上正人

森口良樹

一斉に鶉の立つ熟柿かな

風花やいつもの鴉来てをらず

妹と二人で食ぶる握り鮓

水鳥の飛沫を上ぐる其処かしこ

両の手を丹田に置き春近し

気が付けば一人となりぬ日向ぼこ

掌の石の肌理見る冬灯

鼻眼鏡夫の居眠り春隣

立春や流るる雲を眺めをり

一歩づつ下りてゆけば蠟梅や

早春の雲に届いてへりの音

芳春やテレビに琵琶湖映されて

水仙や向うに見ゆる伊予の海

牧柵に沿うて上れば雪解水

散歩道右へ曲がろうか春の風

子は走る手に手に凧や三の丸

いつまでも吾の影ある雪解川

指揃へ包丁を研ぐ春の昼

木の札の文字は薄れて梅咲きぬ

どこまでも牛の匂や露の臺

春の宵ひとつ摘まめるチョコレート

酒蔵に梅一輪の白さかな

彩雲に呼びかけてみる春の道

公園の桜の蕾小さくて

この道の歩みを止むる初音かな

春宵や色の違へる夫婦箸

春愁や馴染みの山の木にふれて

秋楡

今井淳子

土肥律子

夕暮の土手に冬木の桜かな

岩礁に鵜の群れ立ちて冬の海

日脚伸び仕事帰りの並木道

若草の風受けて立つ大地かな

菜の花や過ぐる電車もまた黄色

菜の花に過ぎ行く電車風残し

春の雨葉先のしづく落ちぬまま

雨上がり土の匂に花思ふ

花便り子の誕生とリンクする

なつ

ものの芽の一夜の雨に膨らみて

椿から花の名を知る帰国子女

これよりは雛の客なりあられ食ぶ

春風に裾三センチ持ち上ぐる

行く人の足を止めたり沈丁花

沈丁花に謝恩会の余韻かな

春霞我が古里のやや遠く

高梨英子

裸木の向うに広き瀬戸の海

トラクター追うて啄む春の鳥

カラカラとバケツ転がり春疾風

花冷や仏見上ぐる堂広し

花冷や一人つきりのミルクティ

大原良子

春の朝伸びをしてゐる黒き猫

旧友と飲み明かしたり春の夜

小手毬を活けし花瓶を拭いてをり

玄関の花瓶に活けてライラック

信号を待つ頭上鳥雲に入る

上島康子

夕暮に木蓮の白重きかな

紫木蓮大きな花びら汚れけり

人の声聞こえて野焼始まりぬ

野を焼いて煙に人の遠くなる

野焼果て新しき風渡りけり

桑門わかこ

釣り談議夜食はうどん春炬燵

ぼつぼつと聞こゆるごとし春の雪

故郷の被災の谷に初音聞く

流れ来て澱みに沈む落椿

夕餉の灯三戸点りて路地おぼろ

志路猿

春浅き夕日を友と見てゐたり

春光や友の背を追ひペダル漕ぎ

この塀の途切るまでの董かな

どこからか人集まりて花の昼

烏曇いつもの道の長きこと

撫子

川底の幾何学模様蜷の道

ベンチから庭の花々見て長閑

補聴器のお試し期間ヒヤシンス

木の芽雨夜の夜の灯を遠く見て

戸を開けて微かに匂ふ花馬酔木

前田範子

高速の窓から見ゆる春景色

菜の花を取つて束ねて画材とす

落椿拾つて孫の首飾り

春休み子供を連れて里帰り

河原静子

カーテンを開ければ春のひかりかな

金箔の残る瓦や梅の花

キャッシュカードブロック解除へ雪の道

落の蔓探して帰る浜の友

ふくらめる花の蕾を見てゐたり

雪積る坂びよんぴよんと白い犬

彼岸会の仏旗はためく寺の門

行き帰り花見る人となりにつけり

声が出ず身振り手振りて春を待つ

牧草のみどり濃淡彼岸かな

引き継ぎを終へて夜桜眺めたる

春風や団地散策自転車で

紀英子

熊谷ゆり子

桜湯

雪柳掃く足元に花散らし

連翹に隣への道狭くなり

春霞山裾の町見え隠れ

公園の花水木へと走りゆく

美耶

五円玉準備して行く春の旅

隣席はチエロを弾く人春の旅

青葉城崖の隙間に露の臺

高嶋絹代

春一番吹き抜けてなほ吹き荒れて

居眠りの目覚めの頬へ春の風

初花の標本木に人だかり

民

月冴ゆる一番星も見つたり

子らの声響き渡りし日永なり

通学路卒業生の静かなり

古川廣子

十字路の右の角より梅香る

梅の香に足を止めたる散歩かな

生まれたと知らせの電話菜種咲く

みさ子

我が庭の落の臺よとさし出され

春めいて立ち話つい長くなり

それぞれに土持ち上げてチューリップ

やす保

十日ほど咲いて散りたる杏かな

水仙の咲いて日差しの高さ知る

花ミモザ買うて足取り軽くなり

お招きに分葱を引いて土産とす

啓蟄の雨に濡れたる蕾かな

花束の差し色となり花ミモザ

腕まくりだんだん上がる春の午後

上條忠

山崎桂子

和田史子

令和八年二月作品集より

亜矢 私の選んだ十句

帰路いつも冬夕焼に向かひけり

佐保光俊

帰路いつも冬夕焼に向かひけり

佐保光俊

大寒の星の明るき家路かな

綾乃

けふは吾ひとりに香り冬の梅

高尾ひとみ

早梅の旅立ち近き子へひらき

暁子

鳳凰の声が聞きたし冬の寺

井藤希

マスクとり吸ひこむ風の香りたる

村上正人

牡丹雪見るまに景色変はりけり

大畑恵

早春の木漏れ日に置くマイカップ

今井淳子

ものの芽の鉢あちこちに動かせり 知佳子

雪解の靄立ち込む田んぼかな

紀英子

水仙の崖となりたる小川かな

辻純江

参道に猿の曲芸梅の花

高嶋絹代

海鼠腸をすつと啜りし母偲ぶ

雲雀

春泥を犬に引かれて渡りたる

撫子

昼過ぎて雪解の青き空となり

松田裕子

たまに来る猫の長居や日脚伸び

志路猿

庭の葱餛飩にのせる香の嬉し

村上正人

粕汁に酔うて会話の弾みけり

和田史子

手つかずの上梓句集や二月尽

森口良樹